

エッセイ集

失いたくないもの

法政大学経済学部

佐藤ゼミ

2007年1月

エッセイ集『失いたくないもの』

若さ

「失いたくないもの」を考える前提として、「今、持っているもの」を考えなければなりません。そう考えた時に僕の「失いたくないもの」は「若さ」だと思いました。

老化は生を受けた瞬間から始まります。勿論、人間には成長期と呼ばれる時期があり、骨や筋肉が成長しているので、正確には成長した後に老いを迎えます。ただ、視野を広げて長いスパンで眺めてみると確実に老いていきます。前段はあくまでも肉体の話ですが、僕が思うのは「肉体的な若さ」ではなく、「精神的な若さ」のことです。「若さ」とは何か。面白い調査結果があります。博報堂は、団塊の世代の約4500人に対してこれまでの人生を自己採点させる調査を行いました。同調査によれば、平均点は、男性が66.6点。女性が72.7点。また、「最も幸せだった時代」として男性、女性とも20代を挙げました。しかし、男性の幸福度が加齢に応じて急落するのとは対照的に、女性は50代で上昇に転じています。その理由は、生活に区切りのついた女性の第二の青春を謳歌しようという気分の反映ではないかとのことです。この結果は、気持ちが若ければ老いてなお、幸せを感じられることの一つの証左ではないでしょうか。

僕の考える「若さ」を極端に表現すると、「子どもっぽさ」と換言できます。子どもが魅力的に映るのは、何に対しても好奇心旺盛で純真だからです。僕は何かをするときに損得勘定で取り組むことが好きではありません。好きでなくてもしなければいけないのが現実で、就職活動をしている最近はそのような気持ちとの葛藤が日常茶飯事です。そんな中でも、時間を見つけてはアンテナに引っ掛かったことに好奇心を傾けます。そこには目的はなく、「したいからする」という極めて単純な思考だけがあります。

「若さ」は「感性」でもあります。空はなぜ青いのか。指はなぜ5本あるのか。「感性」とはそんな些細なことに心を向けることです。普通、大人になるにつれて「常識」が邪魔をします。常識は感性を殺します。感性の衰えは「私らしさ」の喪失です。それは僕にとって何よりの恐怖です。

経済学に限らず、世間では「トレード・オフ」が自明のこととされています。何かを得るためには、何かを失わなくてはならない。僕はこれまで、元あった「若さ」を失って何を得てきたのだろう。それは、モノか、カネか、それとも知識でしょうか。そのどれもが今の僕にとって不可欠なものであるし、さらに何かを得たいという欲望は収まりません。ただ、どうしても「若さ」だけは失いたくない。「若さ」を失うことは、これから社会に出て行くことの恐怖ともいえます。大人の世界に飲み込まれてしまうのではないかという不安と恐怖。

これまで僕は「若さ」の大半を失ってきました。これからも失われていくのでしょうか。それでもどうか、残されている「若さ」を失うことのないようにしたいのです。「若さ」はイキモノらしさであると思うし、僕らしさでもあると思うから。

自分

私の失いたくないものそれは自分である。このテーマが出されて何が失われたいか考えさせられた。もちろん、家族や友達、仲間を失ってしまったら、きっと私は生きていけないと思う。でも、家族や友達などはいずれ失いたくなくても失う時が必ずやって来る。その点において考えるならば、自分は私と同一であるのだから、見失うことはあっても、生きていれば、失うことはないだろう。たとえ死ぬときが来たとして、私つまり自分を失うことがあっても、それは自分の人生の中で一番最後に失うものだ。だから、家族や友達を先に失うことがあっても、生きていれば自分を失うことはない。そうはいっても、家族や友達は私にとって大切な存在である。家族や友達は私を元気にさせ、楽しくさせ、時には傷つけたり、泣かされたりする。そのどれもが自分を形成し、自分の居場所を与えてくれるのである。私にとって、自分と家族や友達

は切っても離すことのできない存在であることには違いない。しかし、自分が存在しなければ、家族や友達との関係も存在することは当然ありえない。だから、失いたくないものの一番になるのは、自分なのである。

今まで人間関係について失いたくないものとして考えてきた。きっと私たちには失いたくないものはたくさんあると思う。もう一つ私が大きな視野を持って考えたときに失いたくないものを挙げるとするならば、環境である。今、地球環境においての意識は高まってきているが、環境が破壊したら私たちは生きていくことはできない。きれいな空を見て、心が晴れやかになることもなくなってしまうかもしれない。私たちはどこかで自分さえよければいいという気持ちが必ず存在するのだろう。だから、今の生活を続けるために二酸化炭素をどんどん排出し、今よりもっといい生活を続けるためにさらに地球を汚している。環境問題に対してよく一人ひとりの意識が大切であると言われる。確かに一人ひとりの意識が大切なこともよく分かるが、やっぱり自分ひとりが地球に優しいことをしても変わらないと思ってしまう気持ちも存在する。でも、自然に触れたり、自然を感じたりすることができなくなってしまうたら、私たちの人生はとでもつまらないものだろう。例えば環境が変化して毎日が夜だったり、毎日が雨だったらつまらない。だから、私たちは地球を守っていかなくてはならないし、失いたくないのだ。そのためには一人の力を大きな力に変えてこの問題に取り組む必要があると考える。

最後に、私が考える失いたくないもの、それは失っては困るもの、つまり今は当たり前のように存在しているが、それを失えば生きていくことができないものだ。当たり前のように存在しているから、今その大切さに気がつくことは難しいのかもしれない。だからこそ、これからはその大切なものを心にしっかりと据えられる人になりたい。

信念

失いたくないもの…私はたくさん持っています。何も手放したくはありません。すべてを手の中に取めたいのです。失いたくないものがたくさんありすぎて…。

敢えて選ぶとしたら信念でしょうか。信念とは自分が正しいと思うことをすることです。私は自分の信念だけは曲げたくありません。柔軟性がないと言われるのかもしれませんが、この信念が己を形成しているからこそ、自分自身があると思えるのです。つまり、己の信念で私は動いているのだと思います。大学に行くのも信念。課題を行うのも信念。夢に向かって努力をし続けることができるのも信念あつてのこと。発言したことに対しては責任を持って行動し、発言に反した行動は行いたくないと考えるのも信念なのです。しかし、私の友人の中で相手に合わせるために薄っぺらな嘘をつく人間がいます。信念を捨てることのできる人間。誰からも気に入られ、生き方は大変上手だと思います。とはいえ、信念のない人間は他人の価値観を鏡にして生きるしかないのです。それも社会に自分を合わせることなんて、到底出来るものでもないのに。信念の限界こそが自分の限界でしょう。いずれ崩壊していくに違いありません。

しかし、一方で信念とは、誤った行為を正当化させる手段にもなり得ます。強く揺るぎ無い信念ほど奇行に走らないことはありません。戦前の日本を考えてみてください。軍国主義下で天皇だけを信じてきた日本国は、戦争で敵味方問わず多くの命を奪いました。強すぎる信念は時に正しい判断を鈍らせます。強大な信念を持つ人間は、自分の価値観だけに頼って生きるしかないのです。

したがって信念とは私の中で失いたくないものとして存在していますが、過剰に持ちたくないものとしても存在しています。なんとも中途半端な信念なのでしょう。しかし、私はとても誇りに思っています。自分らしく考えさせ自分らしい行動をさせてくれる信念を。時には他人の意見によって少し方向を転換させるかもしれませんが、それも自分らしい信念が自分を突き動かしている結果なので納得しています。抽象的ではあ

りますがこれが「私の信念」なのです。

きっと私も大学を卒業して社会へ出ていくと、簡単に信念が捨てられるように、あるいはより強力な信念を持つように、変わっていくのかもしれませんが。それは仕方のないことではあります。私は今ここで綴る考え方を忘れないよう努めていきたいと思います。私は、今ここにある「私の信念」を大切に人生を歩んでいきたいのです。

しかしながら、時間軸の観点を考慮しますと、現在考えている失いたくないものなんて、本当の「失いたくないもの」ではないのだと思います。本当の「失いたくないもの」とは、失ってはじめてわかるものです。現在、満たされているから将来の失った自分が予測できていないのでしょう。おそらく時が過ぎれば満たされていた昔の自分を回顧し、失いたくないもの、否、本当に失いたくなかったものが自然と浮かび上がってくるのです。したがって「失いたくないもの」なんて、そもそも存在しないのが私の考えるところです。今、手中にある失いたくないものは数年後、価値のないものになっているのかもしれませんが。

自分の居場所

「失いたくないもの」と聞いて、富や名声なんて言葉を聞こえたりするから、パッと頭に思い浮かんだ。しかしそんなものは失う以前に得てもいない失いようが無いと、私の考えからすぐ消えた。それでは「失いたくないもの」はなんだろう。とても難しい質問に思えた。その前に、人には失いたいもの・手放してもいいと思えるものはあるのだろうか。私には手放してもいいと思えるものがそんなにたくさんあるとは思えない。例えば友情であれ、お金であれ、何にだってそうである。持っている以上は失いたくないという気持ちが人にはあるに違いない。それならば、一番「失いたくないもの」とは一体何なのであろうか。

依然「カネで買えないもの」というのを討議したが、そのときの私の結論は生まれつきの才能のほかに、優しさなどの人の内面にあるものに至った。人の内面に備わっているものはカネでは買えないから大事である。大事だからこそ失いたくない。「失って初めて気づく大事さ」という言葉が良く当てはまるかもしれない。つまり、「カネに換えられないもの＝手放したくないもの」といえるのではないだろうか。もし金で買うことができるのなら、たとえ失ったとしてもまた買えばいいのだから。カネで買えないから大事であり、失いたくない。

それではもう少し具体的に考えてみることにしよう。私にとっての「失いたくないもの」、それは自分の居場所である。それは自分ひとりの時間はもちろん、家族といるときだったり、学校にいるとき、友達といるとき、アルバイトしているとき・・・人それぞれであり、様々違うと思う。例えば誰かに何かがあったときに自分を頼ってきてくれたり、自分が困っているときに誰かに助けてもらったりする。そうじゃなくとも、些細なことをただ話しているだけでもよい。そうできる相手がいることが重要に思う。それは相手の中に自分の存在があるということの実感にもつながるからだ。やはり、そういったことがあるととても嬉しいものである。しかし、何もせずに自分の居場所ができるかといえば、違うだろう。それは友情や信頼の上に成り立ち、信頼を得るためには様々な気持ちの行き来があると思う。自分勝手に生きていてもそれが成立するとは考えにくいし、友達も家族も誰とも関係することなく一人で生きてゆくこと、これもまたとても寂しいものである。やはり人は人と関係を持ってこそ生きてゆけるのだとつくづく思う。誰かとの繋がりがまた他の誰かとつながったりして、そのなかに自分の存在がある。極端に言えば、それが自分の存在意義といっても過言ではないと私は考える。これが今の私にとって一番の「失いたくないもの」である。

もちろんそう在り続けられるために私自身も思いやりであったり、周りを大事にすることを心がけていかねばならないと感じる。そういった心がけが「失いたくないもの」を今後さらに増やしていけるような気が

するのである。

記憶

失いたくないものはたくさんある。友人、恩師、誇り、絆…。数え出したらきりが無い。その一つ一つを失うことに人は苦しみ、悲しむ。しかし失いたくないものは、いつか必ずなんらかの形で失ってしまうのだと僕は思う。人の限られた人生の中で起こる転機、事件、別離、そういったものが失いたくないものを失わせる。少なくとも僕にとってこれは紛れもない事実である。僕は失いたくないものを失うことを当然として生きるなんてできない。それがゆるぎない事実であったとしても、人が失うことに苦痛を覚える以上、失いたくないものを失うまいとするのが人の運命に対する精一杯のあがきなのではないかと自分は考える。精一杯にあがき、そして失う。

失いたくないものを失わないことに意味があるとは思わない。本質はそれを失うまいとすることにある。その努力、励み、行動が人を変え、進ませる。人はそれに気づかず、必死に物質的に「失いたくないもの」の死守に執着する。その行動に意味があるとは思いますが、それは決して質の高いものではない。金、家、車、ブランドもののバッグ。そんなもの効用を高めるための道具に過ぎない。死ぬ間際になってまでそんなものを失いたくないと思いつけることは僕にはできない。あまりにくだらなすぎる。

本当に失いたくないものとは精神的なものであるべきなのかと思う。絆や誇りはそうだが、僕の場合、「記憶（思い出）」が完全にそれだ。記憶を失うことほど恐ろしいことはない。痴呆や記憶喪失、アルツハイマーなどは恐怖以外の何物でもない。なぜ記憶か。それは自己の生命が刻んできた歴史を唯一見返すことのできるものだからである。それすなわち自己の存在を証明付けるものであることを指す。自己の存在を証明付けるのは「現在（この自分が生きているまさにその瞬間）」と記憶だと自分は思っている。「現在」の自分を失うとはすなわち死ぬことであり、失いたくないものとして挙げるにふさわしくない。失いたくないものとは生きている時にこそ思いついて意味がある。ならば過去から続く自己の存在を証明する記憶がまさに失いたくないものの頂点に立つ。あの時あんなことをした、と思いつけることのなんて幸せなことであろうか。例えばそれが失敗や絶望、羞恥であっても、それは必ず後に生きる。楽しみ、感動などであれば、この先もその記憶を糧に進もうと思う。そしてこのプラスマイナスの記憶が集積してこそ、「自分」という歴史が完成するのである。死に際走馬灯として現れるものがないなど生きてきた意味さえあるのか分からない。あれこれ重ねた経験が記憶となり、歴史となる。人にとって一番重要なのは人生であり、命である。他のものなど二の次である。その重要な「人生」のために、僕は何よりも「記憶」を失いたくない。今ある友人を万が一何かで失っても、記憶があればその存在やその関係の意味だって思いつける。そして新たな道に導いてくれるはずである。人生の集積物「記憶」こそ、人が失いたくないものとして思うのにふさわしいと僕は考える。

名前

私が失いたくないもの。失ってしまったら自分が自分でなくなってしまうもの。それは「名前」です。私にとって名前とは、単なる名称であり、生き方であり、理想であり、日本人であり、ヒトと自分を分けるものであり、帰る場所です。

私は生涯を通して「〇〇」です。それは生まれたときから今まで、そしてこれから命が終わるまで決して変わることはないでしょう。「生き方である」と述べた理由は意識的、無意識的にかかわらず私が常に「〇〇」として今まで生きてきたからです。当たり前のことですがどんなことをしていても、それは「〇〇」なのです。そして、私の中で「〇〇」はただの呼び名とは異なった意味を持ち始めています。たとえば、明日から

私が仮に「△△」の名前で生きていくとしましょう。どうなるでしょうか。結論から言うと、生きていけません。私は「○○」という枠組みで今まで生きてきました。別の枠組みではそれはもはや私ではないのです。俳優などはよく芸名というものを持ちます。そうした俳優が芸名を失ったときどうなるでしょうか。芸名は俳優にとっては「仕事」と密接にかかわってくるものであり、プライベートとビジネスを分ける境界線なのかもしれません。私の考えでは、俳優は芸名を失った瞬間に、仕事から完全に切り離されたことになる。仕事も人生の一部です。その瞬間に彼は、彼ではなくなってしまうのです。名前は単なる名称ではなく私にとって生き方でもあるのです。

他人から見ると自分から見る自分とは異なっていることが頻繁にあります。私は自分から見る自分と理想の自分との間のギャップをできる限りなくすことが成長することだと思っています。私が描く理想とは、「理想の○○」です。こんな○○になりたい！そう思うわたしにとって、名前は理想でもあるのです。

海外へ一人旅に行くによく、自分が日本人であることを実感するといいます。習慣や考え方が異なるからでしょう。視野を広げて考えてみれば、「○○」は日本人であることも表しています。習慣や考え方と同様に、名前によって自分が日本人であることも実感させられます。日本人の私からすると名前は日本人であることも表しているのです。

我が家では猫を飼っています。この猫は私たちにとって特別な猫です。ほかの猫ではその代わりはできません。特別な存在なのです。そこで猫に「チロ」という名前をつけます。するとその途端にそれは「猫」ではなく「チロ」になるのです。同じことがヒトにも言えるのではないのでしょうか。私は「○○」という名前を持ってはじめて「ヒト」と区別されているのです。名前を失えば単なる動物になります。○○という名前が私と「ヒト」を分けているのです。

最後に、私は「名前は帰ってくる場所だ」と述べました。私がこれから生きていく中で、大きな壁に当たって挫折し、仕事も家族も失い、どうやってこれから生きていけばいいのか分からなくなることがあるかもしれません。そんなときにも残るものは「名前」です。だから迷うことはありません。○○としての生き方がそこには表されています。最後に帰ってくる場所は「○○」という名前なのです。だから私にとって失いたくないものは「名前」なのです。

自分の意志とはば

私には失くしたくないものが二つあります。この二つは別々のものですが、二つが同時にあって、互いが意味を持つと思っています。それは自分の意志とはばです。

意志とは、広辞苑によると、ある行動をとることを決意しかつそれを生起させ持続させる心的機能であり、物事を成し遂げようとする積極的な志と書かれています。私はこの意志を失えないものと考えています。それは、この意志がなければ何もできないからです。意志があるからこそ人は目標を決め、それに向かって進んでいくことができます。意志は物事の始まりだと思います。また、私が失いたくないと考えている意志は、自分自身のものであるということです。なぜなら、自分が自分のために心から望むことをするという意志が何よりも強く、意味があると思うからです。他人から言われたことをする。自分に賞賛を集めたくって何かをする。この二つには、本当の意味があるのでしょうか。自分の意志はあるのでしょうか。私は自分が心からしたいという意志に意味があると思います。

はばとは、道路の道幅などのことではありません。心のはばのことを指します。目標に向かい、ここからここまでは守ると決め、それをきちんと守ります。しかしその決められたはばの中では、自分をしばることはありません。そのため、目標に進む途中で大きな壁があっても焦る必要はありません。そのはばの中なら

ば、少し道がずれても、遠回りをして進めばいいのです。しかし大切なことは、このはばをきちんと取り、しっかりと守っていくことです。はばを狭め過ぎれば、その目標しかみえなくなり、周りを見ることができなくなってしまいます。そのため、自分よがりになり、周囲の温かい気遣いにさえ気が付かなくなります。また、反対にそのはばを広げすぎれば、様々な選択肢があるため、右往左往しているうちに、目標を見失うことになるかもしれません。だから私ははばをきちんと取り、しっかりと守ることが必要だと考えています。

私にとって自分の意志とはばは、大切にしたいものではありません。私の人生において、自分の意志とはばは、失うことができない、失ってはならない必要不可欠なものだと考えています。この二つは、自分の根底になるものです。そしてこの二つは、どちらも失くせないものですが、二つが同時になればなりません。時にはこの二つが相反することもあります。しかし自分の意志とはばの両方を持ってこそ、私は意味があると感じています。この二つは当たり前のことで忘れてしまいがちですが、私はこの自分の意志と幅を何よりも失いたくないことと考えています。

希望

私の失いたくないもの、それは希望である。自分の中で希望を持つと持たないとでは、世の中の見え方がまったく違ってくるし、また自分自身の生き方もまったく変わってくる。

私に限ったことではないのかもしれないが、最近の日本の若者はとかく現実を見つめすぎる傾向がある。あらかじめ断っておくが、ここでは夢を追う若年フリーターを推奨するようなことを決して述べるつもりではない。私が言いたいのは若者があまりにも若いうちから現実を直視せざるを得ない状況になっており、自分の可能性をあらかじめ狭めてしまい、夢を描くことすら出来なくなってきたということである。私もかつてはその一人であった。高校生の進路選択の時期になったころ、自分がいったい何をやりたいのかを考えてみた。一般的には受験勉強をして四年制大学に入り就職するというのが王道であるが、私はそのような生き方になんとなく違和感を覚えていた。かつては色々夢に思いをはせていたのだが、今は情報公開の時代になり、インターネット等を使用することによって私たちは膨大な量のデータを得ることが出来るようになった。そこにはまぎれもない現実が堂々と存在しているのである。スポーツトレーナーを例にとって見ると、それ専門の学校に通ってもなれるのはほんの一握りで、一生下働きのものもいれば職を失って路頭に迷ってしまう人もいる。夢をあきらめずにアルバイトをして生計を立てて頑張っているにもかかわらずフリーターになってしまう人も多い。要するに皆そういう現状を知りすぎてしまうため「安定」を求めてしまう傾向が強くなっているのである。そのようなリスクのきわめて高い世界に希望を持って挑戦することができなかった結果、現在の私があるのである。

私も晴れて一般的な安定志向の大学生となったのだが、最初のうちは将来に希望が見出せず大学に通う意味などあるのだろうかと思問自答を繰り返していた。自分の中から希望の文字が完全に消滅してしまったからだ。新たな希望を追い求め、私は人生について考え込んでいた時期もあった。結局答えを出すことは出来ず、自分が大学というフィールドで出来ることを精一杯やって今を一生懸命に楽しもうと考え直したのである。そうして日々を過ごしているうちに自分の中で希望の芽のようなものができてきたと感じるようになった。就職活動を控えた今、よりいっそうその思いは強くなった。将来の自分に何の希望も見出せなかった頃の自分は世の中がくだらないものに見えてしょうがなかった。自分の生き方もその影響によって閉鎖的になったりして、考え込む癖のある私は、くだらないこの世界でこれから永遠に生きていくことを想像して気が滅入ったこともあった。しかし今、大学の3年間を通して私は多かれ少なかれ変わることが出来たと思う。自分の中で希望の目が芽生えているのだ。何がきっかけだったのかは明確には自分でもわからないが、少な

くともかつての自分の世の中の見え方と生き方とは今は決定的に違う。

希望を持って生きろという言葉人を人に投げかけることは簡単だ。だが、希望の持ち方は人によって違う。希望は自分の中で育てるものなのである。私は失いたくない。

ゼミ

私が失いたくないもの、それは「ゼミ」である。テーマを与えられた時から、コレしかないと思っていた。例えば、今からちょうど一年前にこのテーマを与えられていたら、一ヶ月、二ヶ月前にテーマを与えられていたら、「失いたくないもの」は変わっていたと思うし、自分中心に考えてすらいなかったかもしれない。

では、なぜ「ゼミ」なのか。私は、ゼミに入った直後の春合宿から、むしろ、ゼミ見学に行ったときから、このゼミの「凄さ」のようなものはなんとなく感じていた。先輩たちの鋭い意見・思考回路、どうやったらそんな考え方ができるのか、何で寝ないで勉強しているのか。何もかもに圧倒されっぱなしだったが、今まで「学ぶ」ということにストイックに取り組んだことが無かった私には、とても格好良く輝いて見えたし、その姿に憧れた。「私もあんな風になりたい」と。

自分で言うのもなんだが、私はこのゼミに入って、少なからず成長できたと感じている。人前で話すこと、自分の考えを言うことなんて、ゼミに入る前の私には出来なかった。出来なかったというより恐くて逃げていただけかもしれない。しかし、このゼミに入って嫌でもそのような機会を与えられ、多くの課題を出され、それらによって、徐々に何かが変わったような気がするのだ。そんな私も今、変化の中にある。新ゼミ生が入ってきた。たくさんのことを教えてくれた先輩達は4月で大学を卒業し社会人になる。先輩はなんとなく「大学生」ではなくなってきた気もする。当の私は先輩達を追うように就職活動が本格的に始まる。周りの3年生はすでに就職のことしか頭に無いようにも見える。自分の周りがどんどん変化しているのが目に見えて分かり、なんだか寂しく感じる。今まで自分の生活の中心だったもの＝「ゼミ」が一年生、二年生のものになってしまうような感じ。今までの先輩たちもこの道を通ってきたのだろうが、これから一年ないし二年間ゼミで勉強ができる後輩達がうらやましく思える（これでは私が卒業してしまうかのような文章だが笑）。

何で私がこんな気持ちになるのか。私にはゼミが必要だからなのだと思う。私自身が成長するためには不可欠な場であるし、ゼミ活動でのたくさん楽しいこと・つらいこと、そんないろいろなことを共にした仲間はやはり私にとっては最高の宝物である。私の意見に耳を傾けてくれ、時には本音でぶつかり合い、励まし合い、・・・、こんな仲間はめったに現れないと思う。また、ゼミを失いたくないと思う理由に、いろいろな場面で「もっと頑張れたのではないか」という後悔がある。このゼミで何度も、何度も「頑張る」と公言してきたが、そのほとんどは、自分が納得するまで頑張りきれなかったのが事実。大学生活、ゼミしかない私なのに、なんとなくモヤモヤが残ってしまっている。上手くいけば、あと約一年後に私は法政大学を卒業する。大学は卒業したいと思うがゼミは卒業したくない。今、私はそう思う。

出会い

私は、「失いたくないもの」と言われて考えた時に、色々な物が頭の中を駆け巡った。家族、友達、お金、命。だが、今回はそんな当たり前の事はあえて述べない。ふと気づいたのだが、何が今の自分を作り上げてくれたのかということを考えれば、自分なりの「失いたくないもの」が見つかるのではないかと思った。考えてみた結果、私が「失いたくないもの」は、「出会い」だということが分かった。

ある本を読んだ時、ある言葉に私は最も感銘を受けた。「歴史に名を残す音楽家には才能だけでなく、人

との出会いがあるものさ。僕もそういう人間になりたいんだよ。」という言葉だ。この世の中には、歴史に名を残せるほどの特別な才能を持っている人は、ほんの一握りしかいないだろう。だが、「出会い」という術は、常にそこらへんに散らばっている。それを、いかにうまく拾えるかだと私は思う。いくら、才能がずばぬけてあったとしても、それを周りに認めてもらわなければどうしようもない。周りに認めてもらうには、色々な人に出会い、そして、自分を知ってもらって、初めて認められるのである。もし、私の周りに才能があっても「出会い」がなく、羽ばたけないでいる人がいたとする。自分に、0.1%でもその人を羽ばたかせる力があるのなら、私もそういう人間になりたいと望むであろう。

今の私を考えたときに、先程とは逆の立場で見直した。そして、過去に二度の大切な「出会い」を経験した。

一度目は、私が中学生の時だ。小学生までは、先生が色々なことで私に期待をしても、ある程度その期待に応えることができていた。だが中学生になって、バレーボール部に入ったが、初めて経験するものだったので、先生が私に要求したことでその要求に応じることが出来ず、先生に怒られ何度も挫折しそうになった。だが、その度に救ってくれたのが先生の私に対する期待の言葉だった。その先生の言葉があったからこそ、試合でも良いプレイが出来たし、先生の期待に応えるために最後までやり抜こうと、諦めず頑張ることもできた。その先生に出会えたからこそ、忍耐力があり負けず嫌いな今の私があるのだと思う。

そして、二度目は今。そのような私を先生が、少しずつ羽ばたかせようとしてくれている。先生との「出会い」はまだ拾ったばかりだ。これからあと二年間は、数ある中から拾い上げたこの貴重な「出会い」を大切にしていきたい。

今の生活すべて

「失いたくないもの」。考えれば考えるだけ多くのものが浮かんできた。その結果、私の「失いたくないもの」は今の生活の全てだと気づいた。これまで私が生きてきて出会ったり、経験してきたりした全てのものを失いたくないと思う。それは、家族、友人などとの関係はもちろんのこと、日々の生活の中で友人と楽しく遊ぶ時間、ゼミで過ごす時間、実家でゆっくり過ごす時間全てが「失いたくないもの」にあてはまる。逆に「失いたくないもの」は何かあるのだろうかと考えた時に、やはりなかった。もし「失いたくないもの」があるあるのならば、手に入れてないだろう。あくまでも私の場合なのだが、「失いたくないもの」など今までなかった。しかし、「失いたくないもの」もいつかは失ってしまう日が訪れる。それが、すぐ先のこともかもしれないし、死ぬときかもしれない。「失って初めてその大切さに気づく」というフレーズをよく耳にする。いま大切だと感じていなくても、失った時に後悔するということがないように、「失いたくないもの」を大切にしていきたいと感じた。

何気なく送っている日常生活をいま失ってしまったら、と考えた時とてつもなく寂しい気持ちになった。いま当たり前のように大学に通っているが、もし法政に入学していなかったらこの生活を送ることができないし、この二年間に会った人にも会うことはできない。田舎から東京に出てきて、一人暮らしをすることもできなかったかもしれない。こんな風に考えていくとキリがないが、私が過ごしてきた19年間、全てのものが「失いたくないもの」であり、これらがあったからこそいまの私があるのだと思う。

今までの人生に後悔はないとは言い切れないが、いまの自分の環境には満足しているとは言える。しかし、環境がいいだけでは全く意味がない。それを自分から大いに利用しなければ、身に付かない。私は、自分から行動することがあまりない。だから、勉強においても与えられたことをやるだけで、新たに自分から進んでやることは少なかった。これからは自分の好きなことを勉強できる大学で、自分から何かを学習していき

たい。さもなければ、あつという間に四年間が終わってしまう。大学という「失いたくないもの」を失う前に、自分を一回りも二回りも成長させることが今後の目標であり、卒業してからの自信につなげていきたい。

今の私は、「失いたくないもの」に支えられて生活しているということに今回初めて気付かされた。何気なく過ごしては気付かないことを、このレポートを書くことによって気付くことができた。これから先、また新たに「失いたくないもの」がたくさん増えていくと思うが、一つ一つを大切にし、失った時に後悔しないようにしたい。そのためにも、今の自分が全てのものに支えられて生きているということを常に頭に入れて生活し、感謝の気持ちを持って日々を送っていきたい。

友だち

失いたくないものといっても、「思想」であったり「信念」であったりいろいろあるものだと思う。そしてそれは人によって異なるものであり、人の数だけ答えがあるものだと思う。しかし、「失いたくないもの」というのは「失えるもの」を持っていることが前提にあっての話だと思う。「失いたくないもの」を考えると、「失えるもの」があるということとはとても精神的にも、財産的にも余裕のあることではないかと思った。ただ、「命」であったりするようなものは当然のことながら余裕が有る無しの問題ではないと思う。

「失いたくないもの」というのは、いくらお金があっても手に入らないものであったり、探してもなかなか見つからないものであったり、自然にそうなるものであったりするものであると思う。ここまでは私が「失いたくないもの」という題名について考えたときに思い浮かんだことである。ここから、私にとって「失いたくないもの」について考えたいと思う。

私が「失いたくない」と思うものはいったいなんだろうか。「お金」「経験」「思想」いろいろ思いつくけど、追い込まれた時には、「失いたくない」と思えるのかどうかなんてわからない。むしろ、生きるためなら別に失えるようなものであるようにも思う。ただ、「友達」だけは違うと思った。友達のなかでも本当の親友というものは、いくらお金があっても手に入らないものであり、探してもなかなか見つからないものでもあり、自然にそうなるものであると思うからである。また、友達がいるということは、自分にとっての大きな財産となるものである。

もしかしたら、大金を払えば相手は自分を友達であり、親友であると思ってくれるかもしれない。でもそれは、お金を払うという代償を払って手にいれたものであり、自然とそうなったものではない。もしかしたら、探せばみつかるかもしれない。ただ、それは探すという労力の代償であり、自然とそうなったものではない。本当の友達であり親友というものは、偶然に出会い、気が合い、多くの時間を共にし、打ち解けていくものではないだろうか。自分自身の経験ではそうである。

つまり、私にとって「失いたくないもの」とは「友達」である。「家族」でもいいのではないかと思うかもしれない。確かにそうである。しかし、悪く言えば今ある「家族」を自らが決定することはできない。偶然的ではあるけれども、親友である「友達」ができることとは決定的に違うところがあると思う。それは、「自分の意志」ではないだろうか。とても表現のしにくいことであると思うけれども、表現してみるならば、このようなことではないだろうか。それは、選ぶことの出来ない偶然ではなく、最終的には自分の意志で選ぶきっかけを与えてくれる偶然。それが「友達」にあって「家族」には無いものではないだろうか。

自分にとって、喜怒哀楽を与えてくれたり、競争心を持たせてくれたり、言葉にできないぐらい自分に様々なものを教えてくれる。また、相手にとって自分がそのような存在であること。そんな自分にとって掛け替えの無い財産である「友達」それが私にとって「失いたくないもの」ではないかと思う。

当たり前だと思わない心

私が失いたくないものは、「当たり前だと思わない心」である。失いたくないものは何か？と考えた時、家族や友だち・命など、色々なものが頭に浮かんだ。しかし、「失いたくないもの」と聞くと、何か1つに絞らなければいけないような気がしたので、改めて考えてみた。すると、心のどこかで、家族や友だちがいつも傍にいたことが当たり前、生きていたことが当たり前、のように思っている自分に気付いた。酸素は生物が誕生した時から存在するものだから、誰もが常に存在するものだと認識しているし、失うことはないと確信しているだろう。しかし、酸素を失ったらどうなるだろう。生物は生きていけなくなるし、失った瞬間、当たり前だったものが当たり前でなくなってしまうわけだ。上で述べたのは極端な例ではあるが、私は同じようなことが、あらゆる事に当てはまると思う。人は当たり前だと思っていることがいっぱいあると思う。しかし、そういうものに対してあまり重要性や必要性を感じていないというか、どこか鈍感になってしまっていると思うのだ。また、人は当たり前だと思っていたものを失う時のことは、あまり考えていないと思う。

私がなぜ「当たり前だと思わない心」を失いたくないのか。それは今年、大事な人との別れを二度も経験したからだ。一人は小さい時からお世話になっていた合唱団の先生。もう一人は祖父だった。合唱団の先生は、私の人生の道標のような人だった。いることが当たり前で、ずっと傍で見守ってくださると思っていたので、亡くなった時の喪失感はあまりにも大きかった。また、おじいちゃん子だった私にとって、祖父はかけがえのない存在であり、この世からいなくなるなど有り得なかった。昔から二人とも大事な人だと思っていたので、上記で述べたような「鈍感になってしまっている」ということはないと思う。しかし逆に、私はなんでも大切だ！と強く思い過ぎてしまう傾向があるらしく、現実をなかなか正面から受け止められないのだ。当たり前だということに慣れてしまって、大切さを感じられないのも人として情けないと思うが、大切に思い過ぎることによって、現実を見つめられなくなるのもダメだと思う。

今回、「失いたくないもの」のレポートを書くにあたって、失いたくないものを挙げてみると、山のように出てきた。また、多くのことを当たり前だと思っている自分に気付いた。知らず知らずのうちに物事を当たり前のように考えてしまう自分。当たり前だと思っているものの大切さに気付かない自分。大切に思いすぎて、現実を見つめられない自分、そのような自分の現状をふり返った結果、「失いたくないもの」は、「当たり前だと思わない心」なのではないか、と考えたのだ。私が考える当たり前だと思わない心。それは、物事を簡単に当たり前だと思わないことであり、今当たり前だと思っていることを、大切に作る心である。そして、当たり前だと思っていることは、実は当たり前のことではなく、ひとつひとつにとっても感謝しないといけない、ということをおぼろげな心である。

何気ないもの一つ一つ

失いたくないものはたくさんあります。私の周りにはいる人たち、気持ちや心、生きがい、信頼、夢や希望、時間、母の手作りの帽子、世界でたった一つの楽器など…。こう考えると、失いたくないものはお金では買えないものばかりです。もしこれらのものを失ってしまったなら、どんなにお金があったってきっと幸せにはなれないでしょう。

特に私は、希望とか夢とか未来といったものがなくなってしまうたら、誰しもが本当の幸せを感じることはできないのではないかと思います。ある本にこんなことが書いてありました。「幸せとは未来に希望が持てることだ」と。その希望の大きさは人それぞれだと思います。しかし、ほんの小さな希望さえも持てなくなってしまうたら、どうして幸せと思えましょうか。つまりそれは絶望なのです。私自身「絶望」なるものを

味わったことがあります。先には何も見えませんでした。体は生きていますが心は死んでいるようで、自暴自棄になり情緒不安定な生活を送っていて…。希望を失うと何も感じません。怖いものなければ嬉しいこともない。そのころは失いたくないものなんてなかったと思いたくくらいです。たったひとつ「希望」というものが欠けてしまっただけで、幸せとはほど遠い世界に沈んでしまいました。そうかと言って自ら希望を作り出すことは難しい。けれど、どんな絶望を感じても、どんなに希望が見えなくなっても、希望というものを忘れてしまっただけではないのだと思いました。だから希望や夢を失ってはいけない。希望を持つためには、自分自身の心と自分自身の周りにいる人たちという二つのことが不可欠だと思います。まず、自分の心が健康的であることが重要だと思います。心が健康でないと心の反応、感受性みたいなものがぶくなくなるからです。心が健康であるためには心に栄養を与えなければなりません。私の場合、生きがいを持つことが一番の薬です。それは趣味だったり、大切なものを守る事だったり。そして、当たり前ではあるけれどもまわりにいる人々も一人として失いたくはありません。今の自分があるのは、今まで出会ってきた人々があってこそですし、辛いときやおちている時に何度支えられた事かわかりません。だから、今周りにいる人々を大切に、感謝の気持ちを忘れずに、接していく事も生きがいのひとつと言えるのかも知れません。

つまり、自分らしく生きていける生活の何気ないものひとつひとつが、私にとってはとても大切に、決して失いたくないと思うものなのです。何気ないものでも、失ってしまったら、二度と同じものは手に入らないと思います。だから、失わないように努めつつ、自らの心をさらに成長させるためにも自分としっかり向き合っ、ほんの小さなことにも「希望」を見つけ出し、豊かになれるといいなあと思います。そしてそれはお金では決して買えるものではないということを忘れてはなりません。

今という時間

「あなたにとって失いたくないものは何ですか？」このように問われたときに私はなんと答えようかを考えてみた。まず頭に浮かんだのは、身近な人、友達であったり家族であったり親しい人達だった。なぜか？それはその人達なしに今の私はいないし、この先生活していく上で必要不可欠な存在だと言えるからである。なにかが私に起きた時にしっかりと支えてくれる、一緒に楽しい時間を共有することができる、私が間違っていればそれを指摘し直そうとしてくれる、私のことをちゃんと理解してくれる、私一人では気付けないことに気付かせてくれる、私一人では出来ないことを手助けしてくれる、そんな人達を私は失いたくはない。私がある意味を教えてくれるこれらの人々を心から私は失いたくないと思う。

普段当たり前前に存在しているものがなくなることはとても辛い事で、時間が経てば今身近にいる人達もいなくなってしまうのかもしれない、そんなことを考えると「今」を失いたくないなとも思う。日々何気なく、のんきに過ごしている毎日だけど、そんな毎日は永遠ではなくて時間を止めることなどできない。そう思うと私が本当に失いたくないものは「今」なのかなとも思う。時間が経てば何かが変わってくるのは避けられない、何か失うものが出てくるのかもしれない。今年あって来年ないものなどいくらだってある。何かを失うことは仕方ないことだと割り切ってしまうばそれまでのことだけど、できるだけ何も失わず多くのことを得られればそれが一番いいなと思う。

よく大切なものは、失ったときに初めて気付くと言う。だから私自身気付いていない失いたくないものはまだまだ存在していると思う。失いたくないものほど案外気付にくいものなのかもしれない。この先何かを失って後悔することがないように気をつけたい。失うときは常に突然であるから、後悔しないように気をつけることなんて難しいけれども、何かを失って後悔することだけはないように常に本心を隠すことはしないで、素直でありたいと思う。失おうとも後悔しないような、そんな正しい選択をこの先できれ

ば一番だなと思う。

失いたくないと思うものは、どれもその人にとって、とても大事なものでそれらは間違いなくすばらしいものであるように思う。失いたくないものがあれば増えるほど失うかもしれないという不安がうまれ、辛い思いをすることもあるかもしれないけど、失いたくないと思えるものが増えることはすばらしいことだと思う。今思う失いたくないものを見失わないように気をつけながら、これからも私にとって大切な失いたくないものを増やしていきたいと思う。

「失いたくないもの」このテーマを考える上で改めて今大切なことがわかった気がする。どんなに考えたところで、失いたくないものを失わないですむ方法などないので今考え付くこと事だけを頑張り、後悔のないよう大切な「今」を過ごしていきたいと、そう思う。

今持っている自分の考えや意識、そして自分の信念

私が「失いたくないもの」、それは、自分を支えてくれる周りの人たち、家族であったり、友達であったり、そして、今、自分がいる場所、・・・、失いたくないものは数え切れない程たくさんあります。もし失ってしまったらと考えると、とても恐ろしくなります。そして、私が今、最も失いたくないものは、「今持っている自分の考えや意識、そして自分の信念」です。

私はゼミに入り、この1年間、様々な問題に対して学び、考え、議論してきました。私はその時、自分の持った考えや気持ちを決して忘れたくはない、失いたくはない、とこの頃よく思うのです。今年は命に関わる痛ましい事件や問題が多い年だったように思います。飲酒運転での事故が多発し、幼い命が奪われたり、いじめにより、自ら命を絶つ子供たちが多くいました。見ていてとてもつらく、やるせない気持ちになりました。しかし、どちらの問題も根底には、一人ひとりの考えや意識の問題があるのではないかと私は思うのです。「お酒を飲んだら運転をしない」、これは当たり前のことです。なぜそれなのに、飲酒運転での事故がこんなにも起こってしまうのでしょうか・・・理解に苦しみます。この問題はどんなに厳罰化をしても、最後は、個々の意識の問題に尽きるのではないかと思います。一人ひとりの意識を変えなければ解決はないと思います。いじめの問題もそうです。「いじめは決してしてはいけないものである」、このような考えや意識を個々が失うことなく、しっかりと持てば、全てとは言えないけれども、いじめを無くしていくのは可能なのではないのでしょうか。個人の勝手な考えや意識のために、尊い命が奪われるのは悲しすぎます。命は何にも代えられないものなのだから・・・。

今回、このエッセイを書くにあたって、自分が最も失いたくないものについて考えたとき、「今、持っている自分の考えや意識、自分の信念」というのが真っ先に頭の中に浮かんできました。それは、今年1年、先ほど述べたような悲惨な事故や事件が非常に多かったからだと思います。これから私たちの世代は社会に出て働く立場になっていきます。大変なこと、つらいこと、悲しいこと・・・様々な問題にぶつかるのではないかと思います。でも、今回、このエッセイに書いた自分の考えや意識を決して失うことなく、前向きに生きていきたいと思いました。「正しいこと」と「正しくない、いけないこと」との区別をしっかりと自分の中ですることが大切で、かつ、重要なことであると思いました。話が少しずれてしまうかもしれませんが、私が好きなある歌手の歌に、「高ければ高い壁の方が昇った時気持ちいいもんな」という歌詞があります。つらいことや嫌なことがあったときには、いつもこの歌に励まされてきました。この歌詞を胸に、「自分に自信を持ち、前向きに、そして、明るく、何事にも一生懸命に取り組んでいきたい」、と改めてエッセイを書いていました。

感情，悔しさ

私の失いたくないものは「感情」である。その中でも「悔しさ」は絶対に失いたくない。悔しいと思う気持ちが今の私を形成していると言っても過言ではなく、悔しいと思える気持ちは私にとってかけがえのないものである。

私は、小さい頃からずっと「人間、悔しいと思わなくなったら終わりだよ」と、母から教えられてきた。今、改めてこの言葉について考えてみると、“終わり”なんてかなり厳しい表現を使っているな」と思ったが、ある意味間違っていないと思う。なぜなら、悔しさがやる気の源になるからだ。例えば、テストの点数で友達に負けた時、「負けて悔しい」という気持ちが、「次のテストはもっと一生懸命勉強しよう」という気持ちになり、そしてそれが実際に「勉強する」という行動に繋がる。これは、勉強だけに限らず、あらゆる場面においていえることだろう。何か一つの目標に向かって努力していると、必ずと言っていいほど挫折しそうになる時が来る。そんな時私は、「ここで諦めたら自分の意志に負ける、自分に負けるのは悔しい」などと思いながら、その壁を乗り越えようとする。

面接、履歴書などで「あなたの長所は何ですか？」と聞かれたら、私は決まって「負けず嫌いなところですよ」と答える。なぜなら、誰かに負けて悔しいと思う気持ちが、自分を人間として「イイ方向」に導いてくれると思うからだ。何か物事を行うに際して、自分一人でやるということはあまり無いと思う。様々な場面で自分以外の「他人」が関与しているだろう。よく他人と比較するのは良くないと言われるが、私は一概に悪いことだとは思わない。その理由は、他人から受ける刺激が自分を成長させるからだ。「あいつが、あんなに頑張っているんだから、自分も負けるわけにはいかない」といった感じで自分を奮い立たせる。

私の失いたくないものは「悔しいと思える気持ち」である。この気持ちを失ってしまったら、これからの自分は人間的に成長できないだろうし、母の言葉を借りると、“終わり”なのかもしれない。何事に対しても、この気持ちが自分を支えてきた。そして、それはゼミ活動においても同じである。ディベートで負けた、読書会で相手の意見をよく聞けなかった、そして、自分の考えを伝えることができなかった・・・などといった、「はがゆさ」や「悔しさ」が行動の原動力になり、それにより私は一回り成長できる。そして、その一回り成長した私が再び潜在的に抱くであろう「悔しさ」が、私をもう一回り成長させる。

人生の中で「心に残る言葉」というのは、そう多くは無いただろう。私にとって心に残っている言葉は二つ。一つ目は、小さい頃に母から言われた「悔しいと思わなくなったら終わり」という言葉である。この言葉は大学入学までの自分を形成してものの一つである。そして、もう一つは、ゼミに入って先生から言われた言葉である。この言葉は大学入学後、とりわけゼミに入ってからの自分を大きく変化させた。

「悔しさは行動のバネになる」

悲しみ，恐怖，思いやり，情熱，・・・

エッセイの課題が出された。「失いたくないもの」について。失いたくないもの、・・・， すごく考え込んでしまった。友達？家族？愛？夢？お金？時間？単位？

考えていくうちに1つ気づいたのは、私の周りは失いたくないもので溢れている、ということ。いまの生活のなかで、失っていいやと思えるものなんてない。そもそも、失ってもいいと思うようなものは、はじめから身の回りに長く置く気のないようなもので、自然と捨てていくものだろうから、必然的に身の回りは「失いたくないもの」残っていく。

つい最近、失いたくないものの1つを失ってしまった。実家で飼っていた愛犬のララ。私の8歳の誕生日に家にやってきたシーズ犬のメスで、夜はいつも私のベッドの上で丸まって寝ていた姿が思い出される。夏

に会ったときはすごく元気だったのに、……。母は、泣く私を見て「思い出は失われてないよ」と言って慰めたけど、ますます涙がでた。失ったあとに残る思い出はすごく悲しかった。“失いたくないもの”は悲しみ。

クリスマスにお正月に浮かれている間に、テストの時期が近づいてきた。できれば失いたくないもの「単位」。失うと大変なことになるから必死でノートを集めて一夜漬けをする。何のために必死で一晩中勉強しているのかと聞かれたら、自分の知識のため、とか将来のためとかでなく、単位のため、と5人中4人が答えると思う（もちろん、ゼミは別のはなしです!!）。“失いたくないもの”はインセンティブ。

「失いたくないもの」と聞いて、一番に“家族”と思いついた。自分にとって一番大きな存在だし、心の拠り所だし、長期休暇になると帰りたくなる。いったん帰ると、東京に戻りたくなくなる。家族は、自分の全てを受け入れてくれる唯一の場所だと思う。今はちょっと、家族を失うことは考えられない。でも、いつかなくなってしまうことが確実な存在。それが怖い。それゆえに大切にしなければ、とも思う。“失いたくないもの”は恐怖。思いやり。

早いものでもうすぐ大学3年生になる。そろそろ就職について本気で考えなければならなくなる。現実はずらつく厳しいものかもしれないけど“夢”は失いたくない。その夢が大学に進学させたし、色んな行動の原動力になっている。夢を途中で失いたくないから努力する。“失いたくないもの”は情熱。

“失いたくないもの”はよく考えると自分のまわりにいっぱいある。それがもつ意味もたくさんある。“失いたくないもの”は、いろいろな感情を生み出して私を動かしている。失いたくないものがあるから、強くなれたり、逆ににげてしまったり。かけがえの無いものだったり、代わりがいくらでもきくようなものだったり。失うまで、その大切さに気づかないものもあるかもしれない。私はこれからさきの人生でたくさんの“失いたくないもの”を失ったり、得たりしながら成長していくのだとおもう。

仲間

失いたくないものは色々ある。モノや仲間だったりする。私の失いたくないものは仲間である。私が悩んでいるとき、楽しんでいるとき、苦しんでいるときにアドバイスをくれたり、楽しさを分かち合ったり、支えてくれる仲間を失いたくない。これだけは一生失いたくないって気持ちは変わらないと思う。いつも思うが私は本当に回りの仲間に恵まれていると思う。ゼミでは仲間の意識の高さや活動振りに驚かされ、いつも刺激を受けている。意識や活動振りの高さの中でもまれているので、自分自身も日々成長しているとレポートやスピーチをしているときに感じる。ゼミに入りたての頃は3分間スピーチをするのもやっとであったのに、今ではパワーポイントを使った10分間スピーチが短いとすら感じるようになった。このように思うことは自分自身成長しているから思うことだと思う。また、サークルでも多くの仲間と共に日々多くのことを分かち合っている。悩んでいるときに、さりげなく励ましてくれたり、楽しんでいるときは一緒に分かち合ってくれたり、苦しんでいるときには一緒に考えてくれる。こんな仲間といる時、私は本当に仲間に恵まれていると感じる。そして、すごく幸せに思う瞬間でもある。できるならば、このまま時間が止まれば良い、一生そばにいてほしいって思うほどである。「ずっとこうでいたい・時が止まれば良い」って思いがすごく強くて、日々の時間を大切にしようと思いついでいる。

ただ、ゼミやサークルも同じ仲間であるけれど、接するときの気持ちや求めている安らぎや意識が少し違う。ゼミでは自分自身の力の向上を目的にしている。ゼミの仲間の意識の高さや活動振りは今私の置かれている中で一番高い。この仲間と学んでいられることの喜びを感じながら切磋琢磨している。仲間を求めていることが多少違うとしても、仲間は変わらない安堵感くれるし、仲間いるときがすごく落ち着くことに変わらない。だから、私は仲間を大切にしていきたい。仲間だけでなく、私に関わっていくであろう全ての人達

との関わりを大切にしたい。励ましてくれる仲間がいれば、それだけで頑張れそうになる。そう思えるくらい、私にとって仲間は大切であり、失いたくないものである。

信 頼

「失いたくないもの」という言葉を見たとき、すぐにこれといったものは思い浮かばなかった。一見簡単そうに思えるが、考えてみるとはっきりと出てこないものである。だが、考え方を少し変えてみると、「失いたくないもの」とは自分にとって「大切なもの」と同じものなのではないかと思った。そのようにして考えてみると、自然と答えが出てきた。自分にとって「大切なもの」＝「失いたくないもの」。それは人と人とを結ぶもの、「信頼」である。では、「信頼」とは一体どのようなことを言うのであろうか。人それぞれ意見は違うとは思いますが、私は「信頼」を、お互い理解しあい認め合うことから生まれる、支えあえるものであると定義したい。ドラマで金八先生も言っていた通り、「人」という字は2つの棒が支えあって成り立っている。私は今までに幾度となく、友達や先生、両親などに助けられてここまでの生活を送ることができた。

しかし、人と人との間で「信頼」とはどのようなことから生まれ、形成されていくものなのだろうか。これについての答えは簡単である。積極的にコミュニケーションをとることである。とにかく話をしたり、共に作業をするなどのことをして、次第に打ち解け合い、「この人なら信頼できる。」という気持ちになった時から、相互理解が始まるのだと思う。これは何も友達同士に限らず、教師と生徒、上司と部下などそれぞれ同じような過程で「信頼」が生まれてくるのだろう。そして、信頼する・信頼されるという関係は、人と人という間柄でのみ結ばれるというものではない。いま私たちが勉強している経済に関することと言えば、企業間でのやりとりや、貨幣もその1つである。企業とはブランドそのものであり、信頼を受けることこそが企業の大きさのバロメーターになっていると言っても過言ではない。現在、ニュースや新聞などでよく見聞きする企業は、その点について優れているから成長できたのだと思う。そして、貨幣も「信頼」で成り立っているものである。貨幣は、よく考えれば単なるアルミや銅、紙で作られている“ガラクタ”みたいなものである。でも私たちは、それらの“ガラクタ”と商品（モノ）を交換している。これは、お金というものを信頼しているという結果であり、さらに言えば、日本という国を信頼しているということにもなる。つまり、これらのことからわかるように、この世の中は「信頼」から成り立っているということが言える。

しかし、この強く結ばれているように思える「信頼」も、たった1度失敗しただけで、いとも簡単になくなってしまふ脆弱なものである。最近では、多くの会社が不祥事を起こしているように、すぐに信頼を失ってしまうという状況も起こっている。「信頼」を築くのには多くの期間や、多大な労力を費やさなければならないものだが、壊してしまうことはいとも容易くできてしまう。「失いたくないもの」というと、確かに数え切れないほど多くのものがある。でも、その多くのものが存在する中で、私にとって1番失いたくないものは、人間関係を築く「信頼」。私は、人を信頼することができ、また信頼されるような人間になれるよう努力したい。

自分自身

失いたくないものというテーマでエッセイを書くという課題が出されたとき、楽勝！と思いました。しかし、何を書こうと考え始めたとき、考えが全然まとまらず、実は今でもまとまっていません。今、私にとっての失いたくないものとは、自分自身、家族、友達、信頼、向上心、夢……と、すぐに思い付くだけでもこんなにあり、考えだしたらきりがありません。課題では失いたくないものを「1つ」と限定しているわけではありません。しかし、1つに限定しないと、話をもっとまとまらなくなると思ったので、その課題を聞いた

とき、一番初めにピンときた「失いたくないもの」を、書きたいと思います。

私にとって、色々ある中の「失いたくないもの」で絶対外せないのは「自分自身」です。自分自身が大事だということ少し嫌なイメージで捉えられるかもしれませんが、そうではありません。どうして自分自身かという自分が自分でなくなったら嫌だ！と思ったからです。また、そう言う今回は、自分自身が好きなようにも捉えられるかもしれませんが、そうではありません。(どちらかという、たまに自分自身の事を嫌になってしまう事があります。)“自分が自分でなくなる”ということ、考えたことはありますか？私は、自分の体なのに他の人の脳だったらどうだろう？とたまに考えてしまいます。(哲学的ですが……)それは自分なのか？他人なのか？と、問われたらどうでしょうか。答えは人によって違うと思いますが、私はその場合、他人であると思います。私にとって、自分自身を保っているもの、それは「考えること」だと思っているからです。

しかし、考える事だけが、自分自身ではなく、他にも自分自身と言った理由があります。その理由とは、自分の思い出だったり、経験だったりします。過去の色々な経験が今の私を作っているからです。1秒前も過去です。たとえば、佐藤ゼミに入った「今の私」にも、「過去の私」が存在して影響しています。法政大学に入ったのも、高校の私があったから。高校に入ったのも過去の私に影響しているから。そう考えていくと、過去の1つ1つの経験が今の私を作り上げています。違ったことをしていたら、違った今になっていたでしょう。

過去の経験が私を作っている他に、自分自身を形成しているものがあります。それは周りの環境です。家族、友達、先生……周りの人が居て、今の私が形成されている部分も多いと思います。思い当たるのは、小学校5年生位の頃、きちんと自分の意見を持っていて、自分の意見を言える子と出会いました。私は自分の意見をあまり言える子では無かったのですが、その頃から、言うようになったと思います。高校では周りが、自我が強い子が多かったので、自分を持っていないと、埋もれていってしまう学校でした。そうした経験が今の私を作っているのだなとたまに感じる時があります。

今の自分を創ってきたものは沢山あります。そう考えると、自分自身を失うことがとても怖くなってきます。今までのものがなくなってしまうからです。そして、今の自分があることがとても嬉しくも思います。私は、そうした理由で失いたくないものは自分自身だと考えます。また、今の私も未来の私へと繋がっていくので、色々経験し、将来はもっと自分の事を誇れるようになっていたらいいと思います。

友達と家族

私は何を失いたくないのでしょうか。とても悩みました。しかしいくら悩んでも同じ答えにたどり着くのです。それは共に喜びや悲しみを分かち合う友達や家族です。時間は日々過ぎて物はやがて消えてなくなっていくものです。でも失いたくない、変わらずにいてほしいと思うとやはりそこにたどり着いてしまうのです。

私は友達と笑ったり、一つのものに協力しあうことが大好きです。ずっと一緒にいたいと思います。在り来りかもしれませんが、素直にそのひと時を愛し、失いたくないのです。中学生のころ、私は吹奏楽部に所属していました。夏休み、来る日も来る日も暑いなか学校に通い練習に励みコンクールで初めての関東大会進出を決めたとき、部員みんなと幼い子供のように大声で泣いたのを昨日のように覚えています。怒られながらも必死に頑張ったのは部員一人一人がお互いを支えあったからだだと思います。別にそういう大きなことでもなく、例えば友達と語ったり、くだらないことで笑ったりと私たちの中で思い出を作り上げていくことも私にとって大切です。もちろん、ケンカもします。だけど仲直りを必ずします。それは失いたくない

いからです。

家族もそうです。同じ家に一緒にいればケンカもします。だけど家族が一番私のことを理解し心配してくれていると感じます。だから私は家族のために健康でありたいと願います。同じテーブルを囲みお母さんが作った料理をみんなで食べるひと時ほど幸せなことはないと思います。先日家族と過ごしたクリスマス。クリスマスといえばケーキ。みんなで食べるからおいしいのです。独り占めしたって満腹にはなりますが、ちっともおいしくなんてありません。

私たち家族が住む家もとても大切なものです。数年前、家の近くで大きな火事がありました。真夜中のサイレンで起きた私たちは火災現場に行ってみると、家丸々赤い炎に包まれていました。今でもこの目に焼きついてます。真っ暗な夜に赤い炎がさっきまであった家を食べつくそうとしていたのを。赤い炎を前にはただ座り込む家主の姿がありました。寒さのせいもあったかもしれませんが、私は震えが止まりませんでした。もし私の家だったらその場に泣き崩れていたでしょう。家には家族と喜びや悲しみを分かちあった思い出がたくさん詰まっています。それは何にも変えられないものです。

いろいろな人と私は接してきました。嬉しい、楽しいこといっぱいありました。しかし悲しいこといっぱいありました。ある時、私が悩んで友達に相談したところその友達はこう言ってくれました。「友達は悲しみを半分に、喜びを倍にしてくれるんだよ」。本当にそうだと思います。人間はずっとそうやって共存してきたのだと思います。昔、テレビで見たのですが360万年前の原日本人の親子の足跡が残る化石があるそうです。大きい足跡と小さい足跡は寄り添うように歩いていました。確かに時間は日々過ぎて物は、ヒトはやがて消えてなくなります。だけど変わらないものがあるこの親子の足跡は教えてくれました。

在り来りな日々こそ幸せは存在します。宝くじなんか当たらなくてもいいのです。誰かと何かを分かち合う日々、共に生きていく日々こそ幸せは隠れているのです。そんな手軽な幸せを私は手放したくないです。失いたくないです。

「自信」イコール「自身」

家族、友人、恋人…『失いたくないもの』と言われて真っ先に浮かぶ大切な人たち。ではなく、今回はこのテーマと『自信』とゆうものを結びつけて書きたいと思います。

あなたは自分に自信がありますか？こう質問されたとき、日本人のほとんどは「いいえ。」もしくは『どちらとも言えない』と答えるでしょう。もちろん自分も『はい！自信満々です！』とは言えません。当然のことながら自分も日本人の血が流れているようです。では、本当に自信がないかという、そんなことはありません。過信しすぎ、と言われるでしょうが私は常に自分に自信を持って行動しています。幼少期から続けていたサッカークラブ、中高の部活動、大学進学、そしてこのゼミを受けたときも「自分ならできる！」と強く信じて勝負に臨んできました。時には上手くいかず、挫折することもありましたが、最後まで自分を信じて続けられたこと、それが今でも誇りであるといえます。

高校時代、私の憧れの人でもあり、目標としてきた人に陸上の末続慎吾さんがいます。彼はレースの際、常に9秒台で走るイメージを持って勝負をしています。日本人にとって未知の領域である9秒台をも、日々の練習によって築かれた自信によって超えられる存在であると考えているのです。スケールは劣りますが、自分も高校3年間を陸上にささげてきた身として共感し、尊敬しています。スポーツにしても何にしてもすべては「できる。」と信じなければ何も起こせない、そのことを再確認させてもらえました。

彼に限らず、一流と呼ばれるアスリートは自信に満ち溢れていると思います。来シーズンから世界最高峰メジャーリーグに挑戦する松坂投手、女子ゴルフの宮里選手、サッカーの中村選手…。スポーツニュースで

映し出される彼らの活躍、表情、言動に多くの人々が感動するのもうなずけます。彼らは溢れ出る自信とともに日本人である誇りも持って世界で戦っているからです。何度も世界の壁を感じ、自信を砕かれても不屈の姿勢で諦めない彼らが私は大好きです。そして自分の人生の師として多くを学ぼうとしています。

さて本題に戻りますが、なぜ『自信』とゆうものを失いたくないか、それは私にとって自信とはこれまで生きてきた証、すなわち自分自身だからです。大げさな表現かと思われかもしれませんが、今までを振り返ると「本当にこれでいいのかな？」と不安の中決めた道と、自信を持って歩みを進めた道とでは明らかに後者が自分を形成していったと確信しています。これはもちろん道路などの道ではありませんのであしからず…。高校、大学と、この進路で間違いない！と信じてこられたからこそ充実し、またこれからの希望に満ちた大学生活を予感できるのだと思います。私は現状に不満ばかり言い、歩みを止めてしまう人が嫌いです。反対に常に上を目指している人が好きで、また自分もそうありたいと考えています。

『自信』イコール『自身』であるからこそ、自分の過去、現在、未来をすべて信じぬくことがとても大切なことだと思います。だから、失いたくないです。

人とのつながり

私の失いたくないものは「人とのつながり」です。家族、友人、先生、先輩など、今までに出会った様々な人々とのつながりがあるからこそ、今の自分自身があるのだと思います。

中でも私にとって「家族とのつながり」は、とても重要なものだと思います。現在の日本では、核家族化が進んでいますが、私の家は、祖母、父、母、兄、弟の六人で暮らしています。人数が多いせいなのか、「にぎやか」という言葉がピッタリな家族です。そんな家族の存在は、私の支えであり、自分が自分らしくいられる一番安心できる居場所であるといえます。特に両親は、私が困って悩んでいるときに私の長所や短所を知った上で、的確なアドバイスをしてくれる良き理解者です。兄と弟とは、言い合いをすることも多々ありますが、それでもすぐに元通りになれるのは、家族ならではのつながりだと思います。また、祖母は私にとって、尊敬できる女性の一人であります。祖母は毎朝、「今日は何時に帰ってくるの？」と私に聞きます。そして、「家に帰ってくるまでは心配なんだからね」と声をかけてくれます。何気ない朝の会話ですが、私のことを心配してくれ、帰りを待っていてくれる人がいることは、とても幸せなことだと感じています。祖母には、兄弟三人とも親以上に厳しくしつけられてきました。ご飯を食べるときの姿勢や挨拶まで、今でも毎日のように気づいたことは何でも注意されています。「社会にでて恥をかいて困るのは、お前達なんだよ」と私達の将来を心配して言ってくれています。このように注意してもらわなければ、普段の生活で多くのことに気がつくことができなかつたと思います。私も家族の一員として、与えてもらうことを当たり前を感じるのではなく、家族に対して感謝の気持ちをもって接していきたいと考えています。

また、私にとって「友人とのつながり」も失いたくない大切なものです。私の高校時代は、まさに部活一色と言っていいほど、部活動のテニスに夢中でした。そこで私は、本当に「信頼できる仲間」に出会うことができました。あるテニスの団体戦の大事な試合で、私は少しの実力も出せずに負けてしまい、泣いていたところ、私を責める人は誰もいませんでした。「また、一緒に練習しよう」と仲間達は励ましてくれました。この仲間達の支えがあったからこそ、私は最後まで諦めずに部活動が続けることができたのだと思います。厳しい練習にも耐え、笑ったり、泣いたり和一喜一憂しながら多くの時間を共に過ごした仲間達とは、決して一人では味わうことのできない感動や達成感を分かち合うことができました。現在は、高校のときのよう仲間達に会うことはできませんが、一人一人が自分の夢や目標に向かって頑張っている姿を思うと私も前向きな気持ちになることができます。この仲間達とのつながりは、私の宝物といえます。

大学一年目も終わりに近づき、この一年間を振り返ってみると、ただ大学生活に慣れるだけで満足している自分がいることに気がつきました。何をしたいのかもわからず、受身でいたのは確かです。しかし、これからは佐藤ゼミという新しい環境の「つながり」のもとで、自分自身を磨いていきたいです。そして、これからある出会いの「つながり」に期待しながら、今ある「つながり」を失わないように大切にしていきたいです。

私を取り巻くすべて

「失いたくないもの」を考えたとき、色々なものが頭に浮かんできた。今、私の感じている「幸せ」を構成するすべてのものを失いたくないと思った。しかし、少し冷静に考えてみれば、すべてが失いたくないものではあるが、そのひとつひとつを失っても、どうにか折り合いをつけて生きていくこともできるのではないかとも思った。そこで、あえてひとつ「失いたくないもの」をあげるとすれば、それは「自己」である。

こういう時、普通ならまず、「家族」や「友だち」といったものが浮かんでくるのが通常なのではないかとも思う。しかし、「自己」という答えを早々に出した自分に、「なんてひどい人間なのだ、情のかけらもない」と訴えかけてくる第二の自分はいなかった。

私は、中学時代のある一時期、自分があまり好きではなかった。というよりも、嫌いであったといった方が正確なのではないかと思う。自分に自信がまったく持てなかったのである。他人のほめ言葉が、すべて嘘のように感じた。数字で出される評価でさえも。しかし、今、考えてみると、それは他人の評価がどうだという以前に、自分独自の価値観が形成されていない証拠だったのだと思う。だから、「こういう意見もあるのか」という中間的な（複眼的思考の）立場を取ることができず、ただそこにある「価値」を受け入れるか、受け入れないかの判断しかできなかったのだ。当時の私は、「世界」を取り巻くもっともコアな部分、つまり自己の形成がしっかりできてなかったのだ。

ところで、今、私が「幸せだ」と感じられる一番の要因は何であるのだろうか。それは、以前に比べ、自己の形成が格段に進んだからではないのかと考えられる。他人からの評価を鵜呑みにして、それを受け入れかねるということが格段に少なくなった。一方でそれは、頭が固くなったともいえるのかもしれない。しかし、人からの意見を噛み砕いて吸収しようとする体勢、多様な意見を受け入れられる価値観が整ってきたのだともいえるのではないだろうか。

価値観というのは、私自身のもの、私独自のものという印象がとても強い。しかし、乳幼児期なら特に両親、小学生になれば、たくさんの友だちができ、そこから他者との関係の根本を学ぶ。中学、高校では、更に世界が広がる。小説だったり、スポーツだったり、勉強だったり、それらから広がる人間関係だったり。そういうものを通して作り上げられてきた思考は、価値観の形成に多大な影響を与える。自分を取り巻く人やものや作品・・・自分の周囲にある、さまざまなものからいろいろな刺激を受け、価値観を育ててゆく。そのどれかひとつでも欠けてしまえば、今の私の価値観は存在しない。

ある意味では、すべてを失っても構わないのかもしれない。しかし、私は、すべてのものを失いたくないのである。私の周りのすべてのものを守っていききたい、大切にしていきたいのだ。結局のところ、私を取り巻くすべてが「失いたくないもの」という結論に達するのである。

私の「失いたくないもの」は、自己という小さなものに集約されるが、それだけでは終結し得ないものなのである。

本気でやる

失いたくないものって、なんだろう。先生からエッセイの題材として出されて、初めて考えた。最初に思い

ついたものは、家族とか友達だった。次に思いついたのは、思いやりとか、愛とか、目に見えないものだった。でも、考える前から解っている。そんなネタで書いたら、とてつもなく恥ずかしいってことを。だから、もっと現実的で、抽象的でないネタを探しました。そして、決めたネタは「本気でやる」ということです。

私が今回取り上げた「本気でやる」とは、何事に対しても、一生懸命に取り組むという意味です。具体的にいえば、ゼミ活動や、委員会活動、サークル、遊びもです。(前回のエッセイ“自己紹介”でも似たようなことを書きましたが)本気で取り組むということは、自分が常に意識していることであり、自分の長所でもあると考えています。そして、エッセイを書くために色々模索していくうちに、いつから意識し始めたのか、考えました。

すると、私の思い出は小学校卒業時までさかのぼりました。卒業式前に、2年生次受け持って下さった先生で、他校へ異動してしまった“光明先生”という先生が、お祝いの言葉と共に下さった言葉の中にあったことを思い出しました。光明先生は自分の担任の先生ではありませんでしたが、とても良い先生で、多くの生徒が先生のことを好きだったと思います。光明先生は、8歳だった私たちが、いつのまにか12歳まで成長してしまい、驚きと嬉しさのあるあたたかい表情で私たちに言いました。「これから中学校へ進み、大人になっていきます。その成長の中で、本気でやるということ、一生懸命やるということを忘れないで下さい。」当時は卒業という大きな節目において、哀しさばかりで、先生の言葉を特に意識していませんでした。しかし、先生の言葉が私の真髄に自然に染み渡っていたのではないだろうか、と今思います。

また、私個人が最近感じたことですが、家族、友達、学校の先生の在り方が昔とは変わってきているのかなと思います。私は、家族や友達とは、本気でぶつかり合える、本気で心配してくれる人だと思います。例え、意見が合わなくてケンカしたり、衝突しても、それは、私のことを本気で思って、心配してくれての事だからと思うからです。また、学校の先生も本気で生徒のことを考えて指導してきたと思います。その中に体罰があった。それが、いつからかわわり、体罰が悪いことだから、だから生徒のことを本気で考えない、というように捻じ曲がった解釈になってしまったのではないのでしょうか。昔のことは実際には解りませんが、両親の話や、祖母の話を見ると、このように考えました。

だからこそ、私たちは、「本気でやる」ことを忘れてはいけないと思います。本気で取り組む・本気で人とぶつかることは辛いことかもしれません。だけど、辛い中でだけ得られるものや、辛いことを乗り越えたときにこそ得られるものがあるのではないのでしょうか。そういう心の成長とともに人は成長していくのだと私は思います。そして、私は佐藤ゼミに本気で取り組み、本気でぶつかれる仲間になっていきたいです。

大切な人—家族と友人

私ははじめに“失いたくないもの”という課題を聞いたとき、頭の中にいくつもいくつも失いたくないものが浮かんできた。一例を挙げると、命や身のまわりにあるものや時間である。というよりも、今まで失いたくないものについて深く考えることが無かったからこそ、いくつもいくつも浮かんできたのではないかと思った。そこで、初めて“失いたくないもの”を深く見つめてみることにした。そして、いくつも浮かび上がってきた失いたくないものを掘り下げていくと、いつも家族や友人、自分の周りにいてくれる“大切なヒト”が顔をのぞかせる。という結論に至った。

私は昔からおなかが弱く、痛めることが多々あった。そして、包丁で手を切ったときや、インフルエンザにかかったときや、風邪を引いたときなどに心配して病院に連れて行ってくれたり、色々な物事のやり方やマナーを教えてくれたり、高校受験や大学受験のときに支えてくれる。さらに自分が今法政大学に通って、バイトして、友達と遊びに行ったりできるのもすべて両親のおかげである。そしていつもマイナスに考える

私の性格を知っているからこそ、悩んでいると時には心配してくれ、時には笑い飛ばしてくれる。一緒に遊んで、笑って、盛り上げて、私の支えとなる友達。今まで家族や友達とは違った目線で色々なことを教えてくれる先生方。まるで自分の子供のように様に可愛がってくれるおじさんやおばさん。わたしは、これらたくさんの人に囲まれている。たった一人で誰とも関わらずに生きていくことはないのだから、むしろ生きる意味を与えてもらっているのかもしれない。生まれてから現在に至るまでまず一番初めに家族と関係を築く。そして保育所に通うようになって初めて家族以外人と関わるようになる。そして学校に通うようになり、新しい関係が築かれる。これの繰り返しだと思う。時には両親と考え方が全く違い対立し顔も見たくないと思うこともあったり、友達関係が上手くいかなかったり、喧嘩したりして疲れることもある。ドラマや漫画のように丸く収まりすべて上手くいくと言う訳ではない。

しかし、この関係が無かったとしたらどうだろうか。そうしたらすぐに私の人生はないも同然なものとなってしまうだろう。まず友人を失ったら小心者で一人であることのできない私は学校には行かなくなり、友人がいくらいたとしても家族を失ってしまったらどこかいつも寂しく満たされずに目的を失うだろう。そしてすべての“大切なヒト”が私の目の前からいなくなってしまうたり、離れていってしまったら何をしても楽しくなく、怒ることも泣くことも笑うこともなくなると断言できる。そうすると、このまま生き続けたいと思うことはなく命は無意味なものになってしまうだろう。そして私の頭に浮かび上がってきたいくつもの物についても無意味なものになるだろう。と同じことが言えるのだ。両親が自分の親が亡くなったときに言っていた言葉に忘れられない言葉がある。“何が起るかわからない。死んでしまってから後悔したり、ありがたみを知ったりしても遅い。”というものだ。私はこの課題を通して自分にとっての失いたくないものはっきりしたのだから、私の人生を喜怒哀楽のある有意義なものにしてくれる“大切なヒト”を大事にしていこうと思う。

家族との絆

課題で“失いたくないもの”という言葉を目にしたとき、真っ先に思い浮かんだのは“家族”の顔でありました。ありきたりかもしれませんが、私にとって家族とは、それほど大切なものなのです。自分で言うのも変な話ですが、私は三姉妹の末っ子として生まれ、姉達とは年がかなり離れていることもあり、かわいがられて育ってきました。

大学に入り、少々大人になった気でいた私は、友人と遅くまで遊んでいて、11時頃、気づけば携帯電話の着信履歴は、すべて家族の名前でうめつくされていた事がありました。こういったことがあると、正直厄介だな、などと感じていました。過保護だと反発してしまった事もありました。放任主義の親に、やりたいようにさせてもらっている友人を、羨んだこともありました。

ある日、遅く帰って来てしまった日の夜、父や母に説教されてだまりこんでいる私に、姉が次のようにいったのです。「帰ってこないし、電話にはでないし、どんなに心配したのかわかっているの?」と。その瞬間、私はどんな気持ちで涙がでてきたのか、最初わかりませんでした。「怒られて、せめられて辛いから泣いているんじゃないんだよね?心が痛いから涙がでるんでしょ?」と、姉は続けて私に言いました。その言葉で、なぜ涙がでてくるのかわかりました。家族が私のことを心配してくれていたことに感謝もせず、傲慢な気持ちでいた自分に腹が立ち、家族に対して申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

いつもそうなのです。私が周りに流されてしまったり、心情が悪くなってしまったりして、間違った方向へと進んでしまいそうになるたびに、父をはじめとして皆が私を諭し、舵をもとの正しい方向へともどしてくれるのです。この時もまた、人の優しさに気付かず、感謝の気持ちを忘れてしまっていた自分に、家

族は気づかせてくれました。

そんな家族に、私は何かをしてあげられているのか、役に立っているのか、正直自信がありません。それでもおそらく家族というのは、何かをしてあげたからしかえしてもらおうというのではなく、無償の愛があるのだということを、私は感じています。

だからこそ、そんな愛をひしひしと感じる私の家族は、冒頭で述べたとおり、真っ先に思い浮かんだ、私にとってなによりも“失いたくないもの”なのです。いつかは離れ離れになることはもちろんわかっています。でもその時は、私にも新たな家族ができていて、私にとって新たな“失いたくないもの”、また子供達にとっても、そういった存在として捉えられる家族を築くことが、私の理想であり、私が今のかけがえのない家族との生活の中から、見出したものなのです。

ここで、気づいたことがあります。“失いたくないもの”＝“家族”というように私は当初考えていましたが、正確には、それは“家族”ではなく“家族との絆”なのかもしれません。たとえ、肉体的に失っていなかったとしても、絆がなくてはおそらく失ってしまったも同然なのではないだろうか？逆に、たとえ肉体的には滅び、形としての存在は失ったとしても、精神的なつながりである絆さえあれば、永遠に失わないものなのではないだろうか？と私は考えました。ですから、この大切な“家族との絆”を失わないためにも、前記の出来事から気づかされた、人に対する優しさや感謝の気持ち、思いやる気持ちというのは、決して忘れてはいけないものなのだと思います。そう、この“人に対する優しさ、感謝の気持ち、また思いやる気持ち”といったものも、家族に限らず、自分の周囲の人との心の絆を失わないために欠かすことの出来ない、私にとって決して“失いたくないもの”なのです。

記憶

今回だされた「失いたくないもの」というテーマを考えた時に、すごく悩みました。正直言って、今まで失いたくないものを考えた事もなかったし、一つ選ぶのはとても難しかったです。そんななかで、失いたくないものとして選んだのは「記憶」です。

では、どうして「記憶」を選んだのかを書いていきたいと思います。最初に失いたくないものを考えた時は、たくさんものが浮かびました。そこで、自分は欲張りなので、たくさん浮かんだものを出来るだけ多く網羅するものはないかと考えた時に、「記憶」という答えにいきつきました。ただ、ここで言っている記憶は自分なりにかなり広い意味でとっているのも、人によっては違うのではないかと思うかもしれないですけど、僕の考えとしてとってください。

まず、僕の中では記憶というのは色々なものが含まれていると思っています。記憶をすべて失ってしまったら、自分ではなくなってしまうのではないかと思います。というのも、今の自分を形成しているのは生まれてから現在までの過去の記憶だと思っているからです。例えば、過去に自分に起きた事だけでなく身のまわりや世間で起きたすべての出来事、良いものにしろ悪いものにしろ、思い出となって残っていることなど、覚えているか覚えてないかは別として、記憶となって今の自分に何らかの影響を与えているものは数え切れないほどたくさんあると思います。

ただ、今の自分に最も影響を与えているものは、人との出会いだと思います。まず、出会いという言い方はおかしいかもしれないけれど、最初の出会いは両親や兄弟との出会いです。ある時期までは、最も時間を共にしているわけで、影響をうけないわけがありません。次に、友達です。小学校、中学校、高校、大学と学校生活や遊びの中で多くの時間を共にし、いろいろな人のいろいろな考え方や行動の仕方などに影響されると思います。さらに、これ以外の人達からも影響を受けていると思います。僕の場合、中学時代に入

った部活のコーチにすごく影響を受けたと思います。技術的な事や精神的な事はもちろん、人としての礼儀や、日常での振舞い方など、様々な事を学んだ尊敬できる人です。また、他にも影響された人達はたくさんいます。同じ様に、みなさんにもそれぞれ影響された人は1人ではなくたくさんいると思います。だからこそ僕は、失いたくないものとして家族や友達などから1つを選ぶことは出来ず、今の自分に関わった人達という枠組みで考えたいと思ったので、記憶ならばそういう枠組みが含まれると思いましたが。これから先も、様々な人と出会う機会があると思うので、その出会いをひとつひとつ大切にしていきたいと思っています。さらに、その出会いを記憶にとどめるのではなく、記憶というものにしていきたいと思っています。

今回失いたくないものとして「記憶」を選んだけれども、感想として、まだまだたくさんありすぎるなと思ってしまいました。けれども、そういう考えで自分としてはいいんじゃないのかなとおもいました。

友人

「失いたくないもの」。それは誰もが持っているものであり、それぞれ違った独自の「失いたくないもの」があると思う。守るべき者がいる者はその家族や恋人、その人たちを支えていくための資金が挙げられる。あるいは社会的地位、自身の名誉といったものも考えられるだろう。このように「失いたくないもの」は十人十色であり、個々の経験や生活環境、考え方や自分自身が置かれている立場によって決まってくるものだと考えることができる。

このテーマでエッセイを書く課題が出されてからというもの、バスや電車内でふと頭を過れば「失いたくないもの」を考えていた。普段はこんなことは考えない。ましてや考えたこともなかった。そうこうしている内に提出日が迫ってきた。次第に数多くのものがそれではないかと思うようになった。家族、思い出、友人、金銭、自分の時間などが頭に思い浮かんだ。しかし、きっぱりとこれだと決めることのできるものはなかった。別に一つに絞る必要性は必ずしもありません。しかし、一つに絞った。「失いたくないもの」はすべてだ。何も失いたくはない。しかし、これではあまりにも漠然としている。そこで私はすべてとは日常生活なのではないかと思った。だが、それでもまだはっきりしていない。では、日常生活の中で何を失いたくないのかと考えたとき、答えが出た。それは友人だ。私は友人のいない日常なんて考えられないと思った。仮に大学に来たとしよう。友人のみに限ったことではないが、一言も会話を交わすことなく帰宅する生活はどうだろうか。とても寂しくて孤独である。どうってことないと思う人もいるだろうが私はそんなに強い人間ではない。やはり、友人がいることは間違いなく楽しいし、充実した日々が送れると思う。相手もそう感じているだろう。しかし、楽しさや充実感だけが友人から得られることではないと思う。

私は高校時代ソフトテニス部に所属していた。比較的意識の高い環境であった。三年生が引退し、今度から自分たちが部を引っ張っていく番になった。最後の年ということで活気に溢れた。そしてよい結果を残すことができた。今となって振り返ってみると、結果を残すことができた要因は相手の悪いところを指摘し、それを改善してきたところにあっただのではないかと思う。全員がそうやってはっきりと指摘できる人物ではなかった。私もそのうちの一人である。しかし、指摘できる友人がいたからこそ皆で競い合って自分を高め、それが結果につながったと思う。そのようにして自分が成長し、それによって触発されたものが成長していく。これは友人がいることの利点ではないかと思う。大学でもこれと似た体験があった。私は推薦入試に合格し、入学した。授業が始まると一般入試で入学した人たちに比べ、学力に差があるように感じた。友人になった人にセンター試験の得点を聞いてみると、やはり自分の得点のほうが低い。私は自分が情けなくなった。なぜもっと勉強しなかったのだと。一般入試合格者に申し訳なく思った。それからわたしは差を埋めるべく机に向かうようになった。今では少しばかりは縮まったのではないかと思う。

友人と過ごす時間はあっという間に過ぎ去り、非常に楽しい時間でもある。しかし、楽しいだけでは終わってはいけない。お互いが悪いところを言い合えるような関係を築くことが重要ではないかと思う。そうすれば自分を高めることができ、もしかしたら生涯に渡って付き合えるような友人になるかもしれない。なぜなら、部活の時間を過ごした仲間と時折集まって昔話に花を咲かしているからだ。勝手ながら生涯付き合っていける友人に巡り会えたと感じている。私は人見知りなのだがそれを言い訳にせず、多くの人と関わっていきたいと思う。

向上心

私が失いたくないものは『向上心』である。つまり一番大切なものであると考えている。向上を辞書で引くと「前よりもよくなること」とある。つまり現状に満足するのではなく、さらに上を目指すことである。精神的成長と言い換えることもできる。大切なものは失ってからわかると言われているので、向上心を失ったときの自分を考えてみようと思う。まず、朝起きて朝飯を食べる。眠いので通学途中は寝ていく。授業は出席をとる授業以外は出ない。夜はテレビをみて寝る。そしてまた朝が来る。毎日を平穏に送っているだけだ。以前の自分よりよくなっているといえようか。

では、どのようにして向上心を生み出すか。『自己分析』『人を見る』『目標を立てる』の3つのことが必要であると私は考えている。

・自己分析

自分をいい方向に変えていこうとするならば、自分をよく知ることが必要だ。自分とはどういう人なのか、なにが得意でなにが苦手なのか、頭でいくら考えてもその答えが見つかるはずない。私はいろいろなことにチャレンジすることで自分というものがわかると思う。特にリーダーなどの人の上に立つ仕事は自分を知らぬよい機会だ。たとえば計画性、人への思いやり、要領がいいか悪いか、といったところがわかる。

・人を見る

人を見るとは、人から学ぶことである。大学に入ってから自分とは趣味も考え方も違う人と接する機会が多くなった。意見が合わず不快に感じることもある。しかしそれ以上に自分にはない価値観をもった人から学ぶことのほうが多い。自分の価値観が絶対ではないことに気づくことで、もっといろいろなものに触れてみたいという気持ちになってくる。

・目標を立てる

目標があるとそれに向かって努力することができる。そして達成したときには大きな前進となる。将来、通訳になりたいという人は外国語を一生懸命勉強するし、会計士になりたい人は簿記を勉強して会計士の資格が取れるように努力するだろう。しかし多くの人は具体的な将来像というものを持っていないのではないか。少なくとも私は持っていない。しかし将来像がはっきりしていなくても未来に備えることはできる。現時点で自分にできることは何か、それを考えて目先の目標を立てることがいいと思う。たとえば通学時間に読書をしたり、毎日授業に出席するといった小さなことでもいい。続けることで自分にプラスになっていくと思う。
